

Title	話しことばにおける接続助詞「し」の使用実態
Author(s)	阪上, 彩子
Citation	日本語・日本文化. 2015, 42, p. 123-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56917
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究ノート〉

話しことばにおける接続助詞「し」の 使用実態

阪上 彩子

1. 本研究の目的

中級会話クラスで、ロールプレイの試験を行ったとき、ある学習者は依頼を断るときに、接続助詞の「し」を使用して、次のように理由を示していた。

(1) テストもあるし、レポートを書かなければならないし。

日本語教科書でも、「し」を使用する会話例があり、教師用指導書でも断りの場面で、積極的に「し」を使用するようにと勧めている。しかし実際の断りの場面では、(1)のように、「し」を使用しないのではないかと疑問を持った。そこで本研究は、日本語教育でどのように接続助詞の「し」が教えられているかを調査した上で、日本語母語話者が話し言葉において、どのように接続助詞の「し」を使用しているかを明らかにすることを目的として調査を行う。そのために、日本語の初級教科書の「し」の扱いと、コーパスデータの話し言葉における「し」の使用実態を検証する。そして、その結果を生かして、日本語教育の現場でどのように接続助詞「し」を指導すればよいか提案する。

2. 「し」の取り扱い

2.1 文法研究での扱い

接続助詞については、寺村(1981, 1984)をはじめ、多くの研究者が研究している。寺村(1984)では、接続助詞の「し」は異なる述語をもついくつかの節を統括するべき役目を課すと述べており、一文に「…し」が一回だけ使われている例が最も多いことから、一つか二つの節を聞いて、その背後の統括命題がすぐに

理解されることが多いわけで、その形式が、話し手と聞き手の共通の了解、ないし社会的な通念に大きくよりにかかった性格のものであると考察している。

「言いさし文」について研究している白川 (2001) では、接続助詞の「し」のうち、「し」で終了する文を分析している。また中俣 (2006) は、シナリオ、漫画、会話録音資料を分析しており、会話では「し」が単独で理由を表すのに使われ、「し」のつけたし文も、理由を付け足すことが多いと述べている。また、「し」が接続詞の「それに」と共起することを明らかにしている。多くの研究が蘇 (2011) のように、「し」の意味形式を分析をしており、使用実態を調査した研究は少ない。

2.2 初級教科書¹⁾での扱い

2.2 では、9種類の初級教科書で「し」の導入課と導入された意味形式、またどの接続で扱っているかを調査した。それを表1でまとめる。

まず『NEJ』は接続助詞の「し」を取り扱っていなかった。また、多くの教科書で、「し」を2回使用した例を挙げ、解説しており、練習問題では、(2)のように、文や語句を複数提出し、それを「し」でつなぐ問題があった。

表1 初級教科書における接続助詞「し」の導入課と接続

教科書名	「し」導入課	接続
みんなの日本語初級Ⅱ (以下『みん日』)	28 課：並列、理由	普通形
SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Ⅱ (以下『SFJ』)	16 課：理由	普通形
文化初級日本語Ⅱ改訂版 (以下『文化』)	23 課：理由	普通形
JAPANESE FOR BUSY PEOPLE Ⅱ (以下『BP』)	8 課：理由	普通形、丁寧形
日本語初歩 (以下『初歩』)	22 課：並列	普通形
初級日本語Ⅱ (以下『東外大』)	18 課：並列	普通形
初級日本語 げんきⅡ (以下『げんき』)	13 課：理由	普通形
Japanese for Everyone (以下『JFE』)	12 課：理由	普通形
NEJ: A New Approach to Elementary Japanese (以下『NEJ』)	なし	なし

(2) 高い おいしくない あそこで食べません

高いし、おいしくないし、あそこで食べません。

また、『BP』のみ、丁寧形の接続について解説している。ほかの教科書で、普通形の接続であることを説明している。

(3) ～し and, moreover (particle)

Connective Particle shi

The particle she joins clauses, which are usually explanations, excuses or reasons, with the main clause. Before shi, either plain or desu/-masu verb forms (including their past and negatives) can occur.

ex. Kirei desushi, yaiu desu shi, kaimashoo. (『BP』 p. 63)

「し」の単独例を示さず、2回使用した例で導入している教科書は、『文化』『東外大』であった。

それから多くの教科書が理由の意味で「し」を導入しているが、『みん日』のみ、並列と理由の両方で導入している。(4)が並列、(5)が理由である。

(4) 鈴木さんはピアノもひけるし、ダンスもできるし、それに歌も歌えます。

(『みん日』 p. 20 練習 A)

(5) 値段もやすいし、味もいいし、いつもこの店で食べています。

(『みん日』 p. 20)

また、(6)のように「し」がほかの接続助詞と共に共起する例をあげたり、(7)のように「し」で終わる文を導入したりしている。

(6) どうしてこの会社に入ったんですか。

…残業もないし、それにボーナスも多いですから。 (『みん日』 p. 20)

(7) A: よくこの喫茶店に来るんですか。

B: ええ。ここはコーヒーもおいしいし、食事もできるし…。

(『みん日』 p. 20 練習 A)

中俣 (2006) では、「し」が「それに」と共起すると指摘しているが、『みん日』でも (4) のように、「し」と併用して教えている。

以上の例から、初級教科書9種は「し」を次のように扱っていることが分かった。

1) 初級日本語教科書で導入され、多くは理由の意味である

- 2) 「一し一し」と2回使用の形で導入、練習するものがほとんどである
- 3) 「丁寧形の接続については『BP』のみである

2.3 文法解説書での扱い

2.3 では、文法解説書である『学習者と教師のための日本語文型辞典』、『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（以下『ハンドブック』）、『日本語誤用辞典—外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』、以下『誤用辞典』、『初級日本語文法と教え方のポイント』、以下『ポイント』で、「し」がどう解説しているか分析した。

どの文法解説書でも並列と理由両方の意味を取り扱っており、理由について、ゆるやかな因果関係で、ほかにも理由があるという含みがあると説明している。

『ハンドブック』では、

- (8) <接続> 普通／丁寧 +し

「PしQ」は複数のことがらを並列的に述べる表現です。 (p. 198)
と解説し、普通形だけではなく丁寧形の接続も可能であることが解説されている。それに対し、『誤用辞典』のみ「普通形接続」と解説しており、活用の間違いが多いため、普通形の接続を練習させるよう注意を促している。

さらに『誤用辞典』では、「授業では、「し」を使って婉曲に断る会話練習なども取り入れたい。」と述べられている。同じく『ポイント』でも、「し」で断る例を挙げ、「し」が使えるようになるかどうか、初級レベルと中級レベルの違いだと言われることがあると指摘している

これについては、文法解説書ではないが、『みんなの日本語 II 教え方の手引き』でも、「少し改まった感じで理由を述べたり、断りの理由を説明する場合などに使われる。」と解説している。

以上をまとめると、次のことが分かった。

- 1) 「し」の単独使用についても解説している
- 2) 丁寧形の接続も解説しているが、『誤用辞典』は普通形接続のみ説明している
- 3) 多くの教科書で「理由」の意味で導入している
- 4) 断りの理由を説明する場合に「し」を使用すると解説している

3. 調査方法

3.1 研究課題

2節で「し」の扱いを考察した結果を踏まえ、日本語母語話者が話し言葉において「し」をどのように使用するか明らかにするため、次の研究課題を設定した。

- (A) 日本語母語話者は「し」を丁寧形で接続して使用しないのか
- (B) 日本語母語話者は必ず「し」を2回使用するのか
- (C) 日本語母語話者は、断りの場面で、「し」を使用することによって、理由を示すのか
- (D) 日本語母語話者は、「し」を「それに」と併用して使用するのか

3.2 調査方法

日本語母語話者の「そして」の使用実態を調べるために、コーパス調査を行った。使用したコーパスは、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版²⁾』(以下BTSJ)における雑談の会話13774会話分³⁾、国立国語研究所・情報通信研究所・東京工業大学が開発した『日本語話し言葉コーパス』(以下CSJ)に含まれる「学会講演」「模擬講演⁴⁾」を利用した。BTSJは「KWICS」を使い、CSJは「ひまわり」を使って例を抽出した。話し言葉コーパスを利用して、使用数を算出した。

4. 調査結果

4つの課題に沿って、調査結果を述べる。

4.1 「し」の接続について

CSJとBTSJにおいて、接続助詞「し」の使用数を算出した。その結果を表2に示す。

まず、課題A「日本語母語話者は、「し」を丁寧形で接続して使用しないのか」について確認すべく、普通形か丁寧形か接続している数を算出し、表3に示した。

表2より、独話であるCSJよりBTSJのほうが「し」の使用数が多いことが分かる。

また表3から、CSJでは普通形と丁寧形が半数であったのに対し、BTSJでは、

表2 「し」の使用総数

	CSJ	BTSJ
1万語単位	6.5	15.0
使用総数	325	1185
コーパス総語数	498,136	789,190

表3 「し」の接続（普通形・丁寧形）

	CSJ	BTSJ
普通形	159	1130
丁寧形	165	55
計	325	1185

普通形が多いことが分かる。ただし、これはBTSJの話者⁵⁾の65%が友人もしくは後輩であることに起因していると考えられる。

独話だけではあるが、丁寧形が半数以上使用されていることから、初級教科書では、丁寧形での接続についても言及すべきだと言える。

4.2 「し」を2回使用する例

次に、課題B「日本語母語話者は、必ず「し」を2回使用するのか」を明らかにする。そのため、「し」を用いる例文のうち、1文で「し」を2回使用した例文を算出し、表4に示した。

表4より、単独使用はCSJで93%、BTSJで87%を占め、単独使用の例が多いことが分かる。このことから、日本語母語話者は、必ずしも「し」を2回使用しないことが分かる。

表4 「し」を単独か2回以上使用する数

	CSJ	BTSJ
1回	303 (93%)	1035 (87%)
2回	22 (7%)	150 (13%)
計	325	1185

4.3 理由の「し」の使用例

次に課題C「日本語母語話者は、断りの場面で、「し」を使用することによって、理由を示すのか」について明らかにする。そのため、BTSJのうち、「謝罪の会話」「女性同士の断りの電話会話」「同性同士男女の依頼を含む電話会話」「友人同士女性誘い」の4グループ99例を抜粋し、理由の「し」を使用する例を算出した。さらに対照群として理由の接続助詞「から」「ので」の数も算出し、表5に示した。

表5 理由を説明する「し」「から」「ので」の使用数

タスク	し	から	ので	計
断り	0	3	6	9
依頼	2	25	8	35
誘い	7	9	0	16
謝罪	20	51	2	73
計	29	88	16	133

この結果、依頼を受け、断るときに「し」を使用する例は見つからなかった。しかし「ので」や「から」の使用は見られた。(9)(10)ともに、明日自分の代わりに9時から調査を受けてほしいという依頼を電話で受けて、断るときの例である。

(9) まだテスト終わっていないので。(BTSJ: 75-4-JBI10-JSK10)

(10) うん…、9時は多分遅刻するから。(BTSJ: 053-4-JBI01-JOK01)

「ので」や「から」のほかには、(11)のように「んです」を使ったり(12)のように「て」で終わったりする例が見られた。

(11) 私明日バイトなんですよ。(BTSJ: 80-4-JBI02-JYK02)

(12) ごはんを食べに行く約束をしていて。(BTSJ: 84-4-JBI06-JYK06)

断りのデータでは、理由の説明をするのに「し」は使わなかったが、依頼した人が断った人の心的負担を軽減させるために、断る理由となる状況を説明するときに使用した例は見られた。

(13) そうだよな、あさってもテストあるしね。(BTSJ: 076-4-JBI11-JSK11)

また他のグループだが、紹介してもらったアルバイトをやめることに對し、謝罪するタスクでは、(14)のようにアルバイトをやめて迷惑をかけることに申し訳なく感じていることを表すために、アルバイトを辞めたくない理由を説明するときに使用している。また、(15)のように、アルバイトをやめると言っている相手を買める理由として使用する例が見られた。

(14) あー、なんか、めっちゃなんか店長さんによくしてもらってるしな…。

(BTSJ: 291-21-JF29-JF30-1)

(15) でも私も本当にすごい無理言って頼んでもらったし、また初めて⁶⁾から2ヶ月しかバイトやってないよね。

(BTSJ: 293-21-JF31-JF32-1)

以上、断りの理由を説明するときに「し」を使用する例は見つからなかったことから、積極的に断りの理由を説明する場面で、「し」を使用しなくてもいいと言える。

4.4 「し」と共起する接続詞

最後に課題D「日本語母語話者は、「し」を「それに」と併用して使用するのか」を確認すべく、BTSJにおいて「し」のあとに続く語を調査した。

その結果、次の表6、図1のようになった。

「し」のあとに続くもので、一番多かったのは「。」である。つまり、(16)のように「し」で終わる文が多かったことを表している。その次に「ね」「さ」「な」と

表6 BTSJにおける「し」の後続語

	数	
。	491	41%
ね	179	15%
さ	60	5%
な	25	2%
あと	14	1%
その他	416	35%
計	1185	

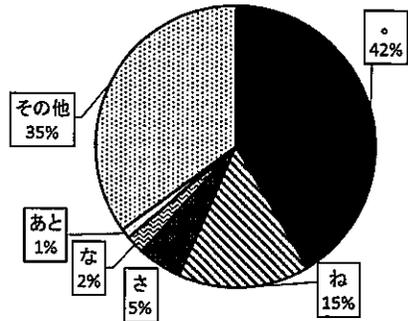


図1 BTSJにおける「し」の後続語

終助詞が続く。接続詞の中では、(17) のように「あと」が一番多く、ほかには「それから」が6例や「だから」が5例あり、「それに」と共起する例はなかった。

(16) あたしなんて50万どころじゃないよ、1人暮らしもしてるし。

(BTSJ: 033-2-IF05-IF06)

(17) でもまた家もあつーいし、あとお盆になると人がわーって、来ちゃうんでー。

(BTSJ: 154-11-BA01-NS)

このことから、話し言葉において「し」が「それに」と共起して教える必要性が低いことが分かる。

4.5 まとめ

以上4つの研究課題について、調査結果から、次のことが明らかになった。

- (A) 独話では、丁寧形の接続が半数以上である。
- (B) 話しことばにおいて、「し」を2回使用する例は少ない。
- (C) 「断り」の場面で「し」を実際使用する例はなく、「から」や「ので」を使用する。
- (D) 話しことばにおいて、「し」が「それに」と共起する例はない。

5. おわりに

本研究は、日本語教育でどのように接続助詞の「し」が教えられているか、また日本語母語話者が話しことばにおいて、どのように接続助詞の「し」を使用しているかを明らかにすることを目的として、日本語初級教科書と話し言葉コーパスを使用して分析した。その結果、以下のことが分かった。

- 1) 接続助詞の「し」は初級日本語教科書で導入され、多くは理由の意味である。
- 2) 初級日本語教科書では、普通形の接続で導入し、丁寧形接続については教えないが、実際は丁寧形の接続も使用は多い。
- 3) 初級日本語教科書では、「し」の単独使用を教えない教科書もあるが、実際は「し」の単独使用の例が85%以上である。
- 4) 初級教科書や文法解説書では、断りの理由を説明するときに「し」を使用することを強く勧めているが、実際の使用例は見つからなかった。

- 5) 初級教科書では、接続詞の「それに」と共起して教えているが、実際は話しことばで「それに」と共起した例は見つからなかった。

以上、話しことばにおける「し」の使用実態について5点明らかになったことを日本語教育の現場に応用する際、次の4点について考慮すべきである。

- 1) 丁寧形での接続についても導入する。
- 2) 「し」の単独使用例を積極的に導入する。無理に「し」を2回つなげる練習は行う必要はない。
- 3) 断りの理由を示すために、「し」を使う練習を特にする必要はないが、するならば、(18)の例のように付け足しの用法として使用する例を練習するといい。

(18) すみません。明日はちょっと…。試験もありますし…。(作例)

- 4) 「それに」と必ずしも教える必要はない。後続する接続詞を導入する場合、話しことばなら「あと」を使用する。

註

- 1) 岩田(2011)では、初級教材を扱っている研究を調査した上、それらの研究で複数採用されている教材9種を分析対象としている。本稿でもそれを採用するが、『語学留学生のための日本語』のみ会話や説明が他と比べて極めて少ないため、この教材の代わりに2012年に発売された『NEJ』を分析対象とした。
- 2) 『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット(2012年改訂版 年改訂版)』を利用した。
- 3) 非日本語母語話者の会話を除いた。
- 4) 模擬講演は、できるだけ年齢と性別のバランスをとった一般話者による、日常的话题についての講演である。話者の大部分は人材派遣会社からの派遣であり、あらかじめ指定された3種の一般的テーマに基づいて、具体的な講演内容を決めてタイトルをつけ、1講演10～15分程度のスピーチをおこなった。発話スタイルは概して学会講演よりもくだけたものとなっている(前川2006:4)
- 5) BTSJの話者の組み合わせの内訳は、初対面が25%、目上が10%、友人が60%、目下が5%である。
- 6) 原文ママ

参考文献

- 岩田一成 (2011) 「数量表現における初級教材の「傾き」と使用実態」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房, 101-122.
- 白川博之 (2001) 「接続助詞「シ」の機能」『意味と形のインターフェイス 中右実教授還暦記念論文集』くろしお出版, 825-836.
- 謝福台 (2006) 「接続助詞「シ」の意味・機能—並列からいわゆる原因・理由へ」『日本語・日本文化研究』16, 63-72.
- 蘇宏偉 (2011) 「接続助詞「し」についての一考察—「並列」から「理由」への意義づけ」『指向』8, 大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻, 72-81.
- 寺村秀夫 (1984) 「並列的接続と影の統括命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』3-8, 明治書院, 67-74.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.
- 中俣尚己 (2006) 「日本語会話文における接続助詞の「つけたし」用法: 並列節の場合」『人間社会学研究集録』2, 大阪府立大学, 47-66.
- 前川喜久雄 (2006) 「第1章概要」国立国語研究所『国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築』国立国語研究所, 1-22.

使用教科書

- 鈴木忍・川瀬生郎・国際交流基金日本語国際センター編 (1985) 『日本語初歩』凡人社.
- スリーエーネットワーク編 (1998) 『みんなの日本語初級Ⅱ』スリーエーネットワーク.
- 筑波ランゲージグループ (1991) 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE Vol. 2』凡人社.
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (1990) 『初級日本語Ⅱ』凡人社.
- 名柄迪 (1990) 『JAPANESE FOR EVERYONE』学習研究社.
- 西口光一 (2012) 『NEJ: A New Approach to Elementary Japanese』くろしお出版.
- 坂野永理・大野裕・阪根庸子・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2005) 『げんき2』The Japan Times.
- 文化外国語専門学校日本語科 (2013) 『文化初級日本語Ⅱ改訂版』文化外国語専門学校.
- AJALT (2011) 『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE II』AJALT.

教師用解説書

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク.
- 市川保子 (2010) 『日本語誤用辞典—外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指

導のポイント』スリーエーネットワーク。

グループ・ジャマシイ（1998）『学習者と教師のための日本語文型辞典』くろしお出版。
スリーエーネットワーク編（2000）『みんなの日本語初級II 教え方の手引き』スリーエー
ネットワーク。

謝辞：本研究では、国立国語研究所・情報通信研究所・東京工業大学が共同開発した『日本語話し言葉コーパス』を利用した。またコーパス利用の際に国際交流基金メキシコ日本文化センター日本語教育アドバイザー蟻末淳氏にアドバイスをいただいた。関係者の皆様に感謝申し上げたい。

〈キーワード〉話し言葉コーパス、初級日本語教科書、丁寧形、単独使用

The Usage of the Conjunctive Particle *shi* in Spoken Japanese

Ayako SAKAUE

The purpose of this paper is to clarify how Japanese native speakers use the conjunctive particle *shi* in spoken language and how this particle is taught in Japanese textbooks for beginners.

Using previous studies and Japanese textbooks, I identified four issues which I shall explain using the Corpus of Spoken Japanese.

My analysis indicates that (a) in more than half the cases, this conjunction is used with the polite form of the verbs in speech; (b) there are few examples where *shi* is used twice; (c) there are no examples of using *shi* for a refusal, *kara* or *node* being the preferred conjunctions in such cases; (d) there are no examples where *shi* and *soreni* are used together.

My paper will show how these results can be applied to Japanese language education in real life situations.